

「とりが鳴く…」

生まれ育った町のことばのことをむかし書いたものが最近見つかった。「故郷のことば」と題したものを消し、「とりが鳴く…」と直してある。「とりが鳴く」は「東(あづま)」の枕詞である。北東北のわれわれの言葉は中央の人には域外の間人(バルバロイ)の言葉でわかりにくく、「とりが鳴く」ように聞こえるのだらうと思っていたらしい。奈良時代の中央からみた東国(アズマ)は、おそらく伊勢、美濃、三河、尾張以東だらう。アヅマの語源は、日本武尊(ヤマトタケル)の、弟橘姫をしのんでの「吾妻ハヤ」という伝説ほか、諸説あるようだが、「サ・つま(そこの端=薩摩)」と「ア・つま(あそこの端)」が対をなし、王権の版図の両端を構成していたという西郷信綱(『古代の声』朝日選書)の説は、当時の大和からの視点を示したものとしておもしろい。東北では自分の地方を自らアヅマとは言わない。鹿児島では東さんはヒガシさんであり、アヅマさんは珍しい。「東(アヅマ)」は中央からの命名である。

三省堂の『時代別国語大辞典・上代編』(初版昭和四十二年)は、枕詞「とりが鳴く」のかかり方についてつぎのように説明している。「東国(アヅマ)にかかると、かかり方未詳。鶏が鳴くぞ、起きよ吾夫(アヅマ)の意とも、鶏が鳴くと東より白みそめるからとも、東国のことばは中央の人には鳥の鳴くように聞こえたのであろうともいわれる。」この最後の説は『日本語の起源』(旧版)で広く知られた大野晋の「とりが鳴く」説を踏襲している。

三省堂の辞書の五年後に出版された小学館の『日本国語大辞典』(旧版、『大辞典』と略称)の定義はつぎのようなものである。「『あづま』にかかる。かかり方未詳。(補注)かかり方については諸説ある。(1)東国のことばが中央の人たちには解しがたく、鳥のさえずりのように思われたところから。(2)「鶏が鳴く、やよ起きよ、吾が夫(つま)」の意で吾夫(あづま)から東国の意にかかる。(3)鶏が鳴いて東方から夜が白みそめるからかかる。(4)夜が明く意で「あ」に続くとか、あるいは、鳥の鳴き声を「あ」と聞いたところからなど。」

三省堂の辞書で諸説の最後に、さりげなく伝聞調で載せられていた「東国ことば=鳥ことば説」が、『大辞典』では(補注)の冒頭に格上げされ、断定されている。この説は、比較的最近の『角川古語大辞典』でも、小学館の『古語大辞典』でも第一の説として載っている。

講談社の『古語辞典』では、「東国のことばが解しがたく、鶏が鳴くように聞こえたことから」は「一説」である。『新潮国語辞典 現代語・古語』（初版、第二版）、角川の『全訳古語辞典』、三省堂の『例解古語辞典』、『広辞苑』などには「東国ことば = 鳥ことば」説はない。このなかで『岩波古語辞典』の記述は突出し、この説だけを特立させてこう断定している。「地名『あづま』にかかる。東国のことばがわかりにくく、鶏が鳴くように聞こえたことから。」

鳥と鶏はちがうなどと言うつもりはない。しかしなぜ一説にすぎなかったものがこのように断定されてしまうのだろうか。万葉集では「鶏鳴」を「トリガナク」と読んでいる例が三例、「(あかときと)カケ(鶏)ハ鳴ク」一例。漢詩(詩経)風に「アカトキ(暁)」一例が一五歌にある。「鶏鳴」をアカトキと読む例は「書紀」(巻二十六)の斉明紀七年の記述のなかにもある。昭和十六年発行、中央公論社版『萬葉辞典』(佐々木信綱編)の、「とりがなく」の項はあきらかに「鶏鳴」=「(暁に)鶏が鳴く」を前提にしている。

「鳥が鳴く(枕詞)あづま。(解釈)暁に鶏が鳴く意。續柄未詳。(諸説)(1)鶏は夜のあか時になくので明にいひかく(万葉考 賀茂真淵)。(2)鴉のなく音のああと聞こゆるを以てつづく(冠辞考續貂 上田秋成)。(3)鶏が鳴く故に吾夫起きよとの意より東国にかける(万葉集古義 鹿持雅澄)等」。

ここには契沖の「暁二鳥鳴テコソ八日出ル事ナレ」(万葉代匠記)はない。正宗敦夫『萬葉集総索引』によれば「とりがなく」は九例あり、『萬葉辞典』には、そのうち、二例(一九九、三八二)が載る。この昭和十六年刊の『萬葉辞典』に契沖以外の諸説を載せているが、東国ことば = 鳥ことば、と思われる説はない。(2)の秋成の考えは、鴉(!)の鳴き声の「あ」がアツマの「あ」につながると言っているのである。

秋田に長逗留した三河の文人、菅江真澄は秋田県鹿角郡の私の町(当時は村)を数回訪れた。最初の天明五年(真澄三十二歳)、二度目の文化四年(同五十四歳)の様子を『遊覧記』のなかにくわしく語っている。しかしどちらの記述も、他の北東北の巡村同様、言葉がわからなくて苦労した、などということをすこしも感じさせない。幕末の北蝦夷探検家、松浦武四郎(今の三重県の人)も私

の母の村でもてなしを受け一泊している。村人はこの珍しい伊勢からの客人を宿舎に拝みに行き、宿舎の主人は宿泊代をがんとしてうけとらないのに困りはてた武四郎は持参の薬を贈呈している。彼が「とりが鳴くような」かれらの言葉を解さなかった様子はまったくない。アイヌ語が混じりながらも古日本語が生きていた江戸時代の東北の北端にしてこうした状態である。その千年前、北東北よりはるかに西南寄りに位置する万葉時代の「東国」の言葉が、当時の中央の人に「わかりにくく、鶏が鳴くように聞こえた」のであろうか。江戸のすぐ外からやってきた田舎者を「むくどり」とばかにしたのは、東国の首府、江戸の町人である。

「とりが鳴く…」という美しい枕詞を狭隘な場に位置させたくないのである。日本語全体についても同じことである。その起源を世界の片隅に無理に収斂させようとする試みには逆らいたい。「日本語の起源」の謎解きは、専門の者も専門外の者もすべて、日本語体験を通じて参加できるロマンの宝庫である。

この小論にはおそらく、無知のあらわれがいくつもあるに違いない。しかし日本列島の縄文時代前期の言語と、中央アジアまで来ていた印欧祖語とは通底していた、という私の確信は変わらない。 05年(とり年)

これは2005年、4月発売予定の「日本語はどこまでさかのぼるか」(ベスト新書)の「あと書き」として書いたものです。